令和8年度山口県立大学 国際文化学部情報社会学科

持ち帰り可

学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠）「小論文」問題用紙

問題　ロボットを造る技術について記述した以下の文章を読み、次の問いに答えなさい。

赤ちゃんであれば泣くことは自然ですし、親のあとを追いかけることも、笑顔を見たら微笑み返すことも自然な行為です。犬や猫には、赤ちゃんとちがって感情を豊かに表す表情筋は発達していませんが、それらの行動には自然なかわいさがあります。

人類に愛される方法としては、犬や猫のような、すでに愛されている動物を想起させる特徴を持つロボットを目指すのも、1つの道です。その方向で開発された製品として、ソニー社の犬型エンタテインメントロボット「aibo（アイボ）」が有名です。

犬の特徴といえば「四足歩行」「尻尾がある」という見た目だったり、「耳をぱたぱたさせる」「排泄するときに片足を上げる」「食べるときには器に顔を近づける」などの仕草だったり、それらすべてが「犬らしさ」と呼べるものです。

aiboの姿や振る舞いは、そういった特徴を捉えています。たとえば犬好きな人がaiboの振る舞いをみると、愛する犬のことを思い出して、幸せな気持ちになるそうです。

しかし今後、より本物に姿形を似せていくと、どこかで思いもよらぬ壁に突き当たる宿命も背負っています。

「不気味の谷」と呼ばれる現象です。

ぼくらは、本物に近づけば近づくほどむしろ、ささいなちがいに違和感を持つようになってしまうのです。

身近でよく知っている存在であるほど、違和感は強くなります。模擬のレベルが低いうちはいいのですが、本物に近づけようとすると、はからずもこの違和感への挑戦になっていきます。理由はわからないけど「なにかがちがう」という違和感は、ぼくらの不安を呼び覚まします。

たとえば、いかにも無機質で、人類とはかなり異なる形質や素材感を持つヒト型ロボットには不安を抱きませんが、人類にそっくりな肌を持つロボットを目の前にすると、首の動きやまぶたの開け閉めといったわずかな異常を検知して、警戒することがあるのです。

「不気味の谷」は人類が直感的に感じるものですが、その直感が発達した理由を考えてみると、たとえば太古の時代に、仲間の状態がわずかに変化したときの「異常検知」という本能に由来するのかもしれません。

伝染病にかかった人や狂犬病の犬に近づかないためには、ささいな変化に敏感である必要があります。そういった身を守る行動のために備わった本能の1つが「不気味の谷」という現象として、表れているのではないかと思います。

つまり、動物に似たロボットを造る場合は「オリジナルの動物に似すぎないようにする」か「直感レベルで違和感を持たないくらい、そっくりにする」か、選ぶ必要があるのです。

前者を選ぶと、似せていることのメリットが限定されてしまいます。かといって後者の道を選ぶと、似せるためだけに必要以上にコストも手間もかかります。そっくりにすると「不気味の谷」は越えられますが、違和感が減るだけとも言えて、その高いコストに見合うだけの価値を提供できるサービスは、少なくとも現時点ではそれほど多くありません。

aiboは不気味の谷に落ちないように、あえてロボットらしさを残しながらも犬の特徴を捉えた可愛らしさを表現していて、よく考えられています。少なくとも、犬好きな人が持つ、犬の愛おしい特徴に関する記憶を引き出す目的であれば、本物そっくりにする必要はないという好例です。

もちろん、生体そっくりのロボットを造る技術は、今後も興味深いアプローチです。しかし、あえて生体とは異なる特徴を持ったロボットのほうがより普及していくでしょう。

出典: 林要『温かいテクノロジー　AIの見え方が変わる　人類のこれからが知れる　22世紀への知的冒険』ライツ社、2023年　157頁-160頁

問1．「不気味の谷」について本文中の言葉を用いて200字以内で説明しなさい。

問2．愛されるロボットを造ることに成功した事例と失敗した事例があります。成功した事例、あるいは失敗した事例を具体的に1つ示した上で、その理由について600字以内で記述しなさい。

令和8年度山口県立大学 国際文化学部情報社会学科
学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠）「小論文」出題意図

出典

林要『温かいテクノロジー　AIの見え方が変わる　人類のこれからが知れる　22世紀への知的冒険』ライツ社、2023年　157頁-160頁

出題意図

出題のために引用した文章は、世界初の「家族型ロボット」の開発者の著書が出典である。複雑化する技術を社会で活用するためには、複雑な処理を実施できる技術開発と本質的な処理以外を削ぎ落す技術開発の 2 つのアプローチがあると言われている。本著は、後者の技術開発について主に述べている。

本小論文課題では、「不気味の谷」というロボットの技術開発において、前者と後者のバランスに直結している言葉自体の意味を文章中の記述から読み取り文章として表すことができるかを確認する。その上で、愛されるロボットという観点での技術開発に関して、普段から情報収集を行っているか。また、それらの情報をいかに自身の経験と紐づけて考えることができるかを問うている。